

中国・貴州省の子どもたち

主幹 中村 昌子

初夏を思わせるような毎日となりました。各学年の遠足や移動教室が続いておりますが、仲間と共に楽しい時間を過ごした子どもたちがより一層、絆を深め始める頃にもなります。

さて、私はこの度5月18日(日)～25日(日)の8日間、国際連合大学の委託機関「ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)」の国際教育交流事業である「中国政府日本教職員招へいプログラム」に参加させていただく機会を得て、中国北京市、貴州省貴陽市、上海市に行ってきました。

特に一番長い5日間を過ごした貴州省貴陽市の学校の様子をご紹介します。中国の南西部に位置し、人口4千万人程の省です。同行した中国教育部(日本では文部科学省にあたる機関)の方が初めて訪れると話していたのでびっくりしました。特徴としては少数民族の方が占める割合が省の人口の約40%で、中国の中でも高い割合だそうです。ですから一つの学校の中に様々な民族の方が集まっているそうですが、互いの文化を大切にしながら学んでいるということでした。参観した学校の一つである「貴陽市第一実験学校」ではその名が示すように学校独自で開発した様々なカリキュラムに子どもたちが生き生きと取り組んでいました。中国の伝統を学ぶ授業ではなんと餃子作りをしていました。ちょうど教室を訪れた時にできあがったばかりの



水餃子を次々に差し出してくれておいしくいただきました。書道の授業では小さなテキストを手に、大人でも書けないようなすばらしい行書をすらすらと書く姿がありました。一人一人が自分の書きたい書体を練習している様子が印象的でした。学校の教育理念の一つに「潜在的能力を開発する」という項目があり、1年生から課外活動として週一回自分の選んだ活動に取り組んでいるそうです。発表会の中では、英語の歌やダンス、社交ダンス、楽器演奏、独唱、民族舞踊、伝統楽器演奏等々、実に様々な演目を自信たっぷりに演じてくれました。子どもたちは民族の文化や自然について世界の人に紹介したいという意識が高いということでした。同時に外の世界にも出て行きたいという意識も高く、小学校での英語学習も三、四年前からスタートしており、こちらが片言の英語で話しかけるとほとんどの子どもたちが笑顔で応対してくれたことにはびっくりしました。貴州省の子どもたちと接して、大泉の子どもたちと全く変わらない素直さや明るさにほっとしながらも、少数民族の文化を大切に学び、それを発信して行こうとするエネルギーに圧倒されました。



日本の子どもたちも、日本人としてのアイデンティティーを大切に、日本の文化を自信を持って伝えていくことができるようになることが「グローバル社会に生きる力」の大切な要素であることを改めて学んだ旅となりました。